

# DIABLO

## IMMORTAL™

人は皆罪深い

RYAN QUINN 作 ショートストーリー

ストーリー

RYAN QUINN

挿絵

CYNTHIA SHEPPARD

編集

CHLOE FRABONI

デザイン&アートディレクション

COREY PETERSCHMIDT

伝承顧問

IAN LANDA-BEAVERS

クリエイティブ顧問

DAVID LOMELI, JOHN MUELLER,  
RAFAL PRASZCZALEK, DAVID RODRIGUEZ,  
MAC SMITH

制作

BRIANNE MESSINA, AMBER PROUE-THIBODEAU,  
CARLOS RENTA

スペシャルサンクス

SCOTT BURGESS, TODD CASTILLO,  
QIAN LIN LIU, JESS LYTTON, JUSTIN  
MURRAY, EMIL SALIM, HUNTER SCHULZ,  
BEN WAGNER, MIKE YAKLIN そして過去と現在の「  
イモータル」チーム。このクラスの個性がこれほど特別  
なものになったのは皆さんのおかげです。感謝！



# 人は皆罪深い

独房から出され、はしけ船に連れて行かれるケズを待っていた沈黙は、檻の中で過ごした2年の月日より彼女を苦しめた。突き飛ばしてくる者はいない。唾を吐く者もない。腐った魚や、その倍は汚らしい言葉を投げってくる者もいなかった。ノコギリのような鱗を貼った幅広の兜をかぶった衛兵たちにうながされ、滑りそうな板をゆっくりと登っていく。彼らは左右から一人ずつ、彼女の肩に手をかけていた。むらのない穏やかなその歩みは慈雨を思わせた。

前はこうではなかった。あの時は自分もいけなかったのだが。

今日はこの力が必要なのだろう、と彼女は当たりをつけた。敬意を感じる。決して十分ではないが、このヤツメウナギどもにしては上出来だ。運がよければ、手づかみで食事しても許してもらえるだろう。器からの直食いは、やはり気持ちのいいものではない。

贖罪の期間があまりにも長引いていたため、ケズはなぜ今さらと驚いた。彼女を告発した人間が死んだのかもしれない。ただ単に泳ぎに行くだけという可能性もある。どちらにせよ、それが嵐の目のような束の間のものでなければいいのだが。

ケズはターコイズ色の四角い帆をよけて通り、護衛にうながされるまま、はしけ船の後部ベンチに腰かけた。

その日は過ごしやすい天気だった。つまり、しとしとと雨が降り、顔がかじかむ程度の寒さだ。雹が降るほどではない。ケズは冷たく清々しい空気を肺いっぱい吸い込んだ。後部ベンチや奥のほうの列にはあちこちに人の塊ができていた。皆吐く息が白い。何人かは乗り込んできた彼女をまじまじと眺めていた。青白い顔ばかりではなく、日焼けした顔もあった。偉丈夫もいれば小柄な者もいる。雑多な寄せ集めだが、縫製のきちんとしていない茶色の囚人服を着ている点では皆同じだった。

腕はむき出しではないが、毛皮などついていない。震えながら身を寄せ合っている者たちを見て、故郷の記憶がよみがえる。一人では過ごせないほど冷え込むと、隣近所の人々とあんな風に寒さをしのいだものだ。故郷はラグサウンドという。コールドアイルの最西端、首都ペルガインを囲む無数の小島の一つだ。都市の港から出た漂流物は、やがて小島の周囲に流れ着く。その様子は小島がスカートをはいているようにも見えた。世界のどこかで危機が起きて、知らせが届くのは最後。そんなラグサウンドが帰る場所だった。檻に入れられるまでは。

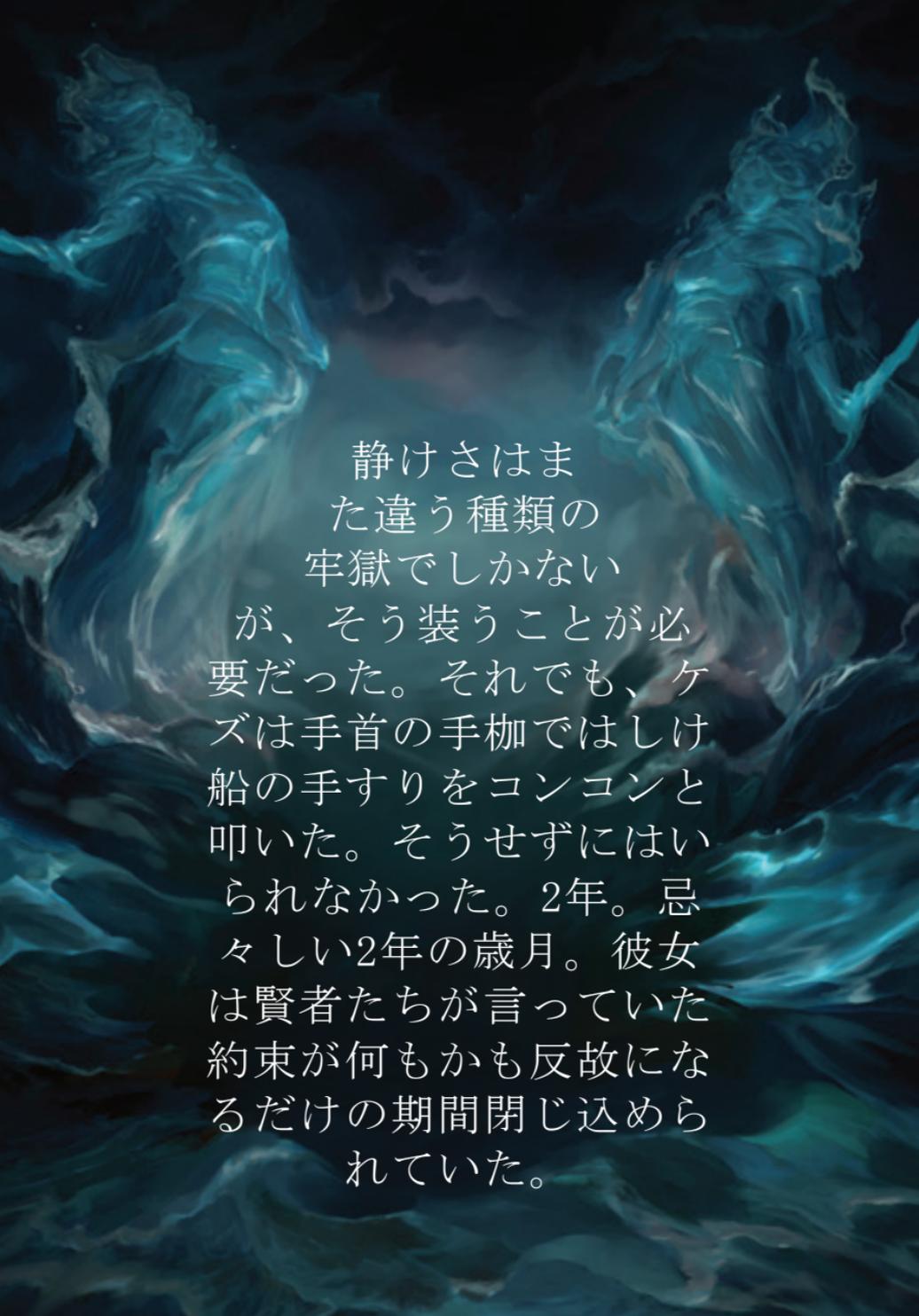
囚人の一人、首が太く豚鼻で、生え際が後退しつつある黒髪の男が激しく咳き込んでいた。イカでも飲み込んだかのように喉を動かしている。しかし、男はケズを見て一瞬固まると、何かを鼻でズズッと吸ってかぶりを振り、ぐるりと衛兵を見渡した。

「こいつはいい。ほかに誰を背負えばいい？ 赤ん坊か？」

そう言って、もう何回か大きな咳をする。おそらく狩人だろうとケズは判断した。この男が家族を養うために角笛と槍を持って海に出る姿が目に見えた。特別な人間ではない。大方、檻に入れられたのは、行儀よくしているべき人間の前で殴り合いでもしたからだろう。

振り向いた男の目に何が映ったかケズは知っていた。

くすんだ肌、ぼさぼさの頭。フードから飛び出したろくに櫛も入れていない黒髪は、濡れてもなお風に膨らんでいた。針金のように細い手足に低い背丈。両手は体の横にだらんと垂れ下がり、両足はまるで飛び上がる準備をしているかのように互いにそっぽを向いていた。檻の中でも彼女はほとんど、いや、まるで変わら



静けさはまた違う種類の  
牢獄でしかない  
が、そう装うことが必要  
だった。それでも、ケズは  
手首の手枷ではしけ船の手  
すりをコンコンと叩いた。  
そうせずにはいられなかつ  
た。2年。忌々しい2年の歳  
月。彼女は賢者たちが言っ  
ていた約束が何もかも反故  
になるだけの期間閉じ込め  
られていた。

なかった。檻の中は立てないほど狭かったのだが、囚人服はぼろぼろで、首や裾はネズミにかじられたかのような有様だ。

この寒さの中でも、ケズはあまり咳をせず、震えてもいなかった。唇だけがもぞもぞ動く。生にしがみつく生き物のように。彼女は眉根をぎゅっと寄せた。その気になれば、この首の太い男が間違っていることを教えてやることもできた。地面に組み伏せれば、ほかのごろつきどもの哄笑的になっただろう。そもそも、この男は償いのためにここにいるのだ。

だが、そんなことをしても故郷には帰れない。

代わりに、修行のことをできるだけ思い出すことにした。大勢の人の輪の中にいる自分をイメージする。皆彼女に何か囁いたり、大声で叫んだりしている。誰もが何かをほしがっている。だがそれは彼女には与えることができないもの、矛盾したものだ。心を乱すものたちが嵐のように吹き荒れる。手に負えなかった要求。手放さざるを得なかった要求。ひたすら耳を傾けていると、そうした大声はやがて小さな鼻歌のようになった。

ケズの眉間のしわが緩む。力を抜いて一文字になった唇からは、もう特に何も読み取れない。彼女の顔は平穩そのもののような仮面になった。静けさはまた違う種類の牢獄でしかないが、そう装うことが必要だった。それでも、ケズは手首の手枷ではしげ船の手すりをコンコンと叩いた。そうせずにはいられなかった。2年。忌々しい2年の歳月。彼女は賢者たちが言っていた約束が何もかも反故になるだけの期間閉じ込められていた。しかし、声に出して言い返しはしない。コツコツと手枷を打ちつけ、ひたすら狩人の咳に耳を澄ませる。やがて相手は目をそらした。

そのとき、床板を軋ませながらブーツの足音が上ってきた。アザラシの毛皮ではない。ちゃんとした硬いブーツだ。横柄そうな歩き方だが、ほかの者と完璧に歩調を合わせている。風が耳元でうなった。だが、それは彼女の耳元だけの話。船の帆はピクリとも動かない。喉が締めつけられるような緊張を覚えた。

3人の衛兵は槍の石突きで甲板を叩いた。「賢者キノン」と一人が口にすると、ほかの二人も順番に、同じくらいの声でその名を唱えた。

ケズは両手を尻の下に敷き、努めて相手を見まいとした。

キノンは豪壮ななりをしていた。旧ペルガイン風の服装だ。赤と紫に染めた羊毛のマントを肩で交差させ、2本の錫杖をかたどった金の留め具で留めている。ふさふさとした毛髪を喉や肩まで無造作に伸ばしていたが、ひげだけはきちんと整えていた。

への字の形をした口元はあまり動かない。灰色の瞳は、しかめ面の表情と相まって哀れな印象を与えた。

いかにも役人然とした見た目だ。空っぽの器。その地位にいないければ誰も省みる者のいない男。

手枷をつけたケズでも、体当たりすれば我が身もろとも突き落とせそうだった。落ちたときに板にでもぶつかれば、頭に怪我させることもできそうだ。泳いで戻る途中で、海の獣マーロジが襲ってくれるかもしれない。

修行の時からずっと彼女の中にいる連れ-彼女を囲むように四方から聞こえるその声は、彼女の頭と心が生み出すもので、自分や昔の友人の声のように聞こえることもあれば、まだ名前のない無数の古代の囁きのように感じることもあった-が、静けさを求めてどよめいた。風はやんでいない、と彼らは言った。波は止まってはいない。嵐の中心に静けさを探せ、そうすれば静寂は通り過ぎる嵐にも乱されない。

彼女は声を締め出した。こんな風に霧が囁いてきては、静けさを装うこともできない。

キノンは後部ベンチの前をゆっくりと歩いていく。囚人の一人、そば濡れた茶色い髪をした瘦身の男は、賢者が目の前を通ると背筋を伸ばして座り直した。男には目もくれずに、キノンは話し始めた。魚のように頬を膨らませながら。

「マールウェンズ・ステイは特に行く価値もない島です。今週はずっと霧が出ています」

ケズの知っている島だ。ラグサウンドから船で半日の距離にある。諸説あるが、その名はマールウェンという厳格な女帝が一時の隠れ家としたことに由来する。そしてこの霧は、自分の命を狙う姉妹から逃れるために泳いで海を渡り、人々に見つけてもらい、讃えてもらえるところに流れ着いたマールウェンが最期に吐

いた息だとされる。真偽はともかく、ほとんどの賢者はそう伝えられている。

賢者は話を続ける。「ほとんどの者は避難させることができませんでした。だが全員ではない。残された者たちが悪鬼としてよみがえったら、その時は眠りにつかせなければなりません。そうしないと、風向きが変わった時… その風に乗って遠くに行ってしまうす」つまり、ラグサウンドをはじめとする島々を直撃し、殺りくの限りを尽くすということだ。過去の歴史が参考になるのなら。

キノが囚人の名前と数字を読み上げる。一度に一人ずつ。ポニード、セドローク、シラ。皆、同じ島の者たちだ。

「ラグサウンド出身のガート。1年の贖罪。残り1年」。それに答えるかのように豚鼻の狩人が咳き込んだ。

「たったの1年？」と、誰かが小さくつぶやいた。信じられない、といった声だ。

ガートはニヤリと笑う。

キノは一瞥もせず続ける。「ラグサウンド出身のバルティク。4か月の贖罪。残り1年」。バルティクと呼ばれたのは、キノが前を通ったときに居住まいを正した男だ。通り過ぎた後も、賢者の後ろ姿に敬礼までしていた。

「ラグサウンド出身のケズ」その声に込められた感情は、ほかの者と比べて特に強くもなく、弱くもなかった。「2年の贖罪。残り2年」

彼女は一言、「はい」とだけ答える。

「皆さんは己の地位に対する務めを怠りましたが、ペルガインは今日、あなた方の欠点には目をつぶり、約束だけに目を向けます」退屈そうな声だった。同じことをもう何度も話しているのだろう。

「あなたたちの償いは、もはや閉じ込められることではありません。再び試みることです」キノは全員に向けて身振り手振りしていた。だがその視線は彼女のほうを向いていた。「あなた方の罪を称え、それによって魂に変化があったことを証明するのです。2日以内にこれを成し遂げれば、刑を取り消して差しあげます。どこでも好きな島で自由に暮らすことを許しましょう。希望

先が受け入れれば、という条件はありますがね」

2日間。終われば帰れる。言葉の意味が身にしみた。

キノンはそこで間を置いた。明らかに効果を狙っている。「仮に失敗して、生きて帰ってきた場合には、檻に戻ってもらいます。あなた方としても、天に合わせる顔がないでしょう」

ケズはこの男を突き飛ばすのはやめた。船を降りる者はいなかった。

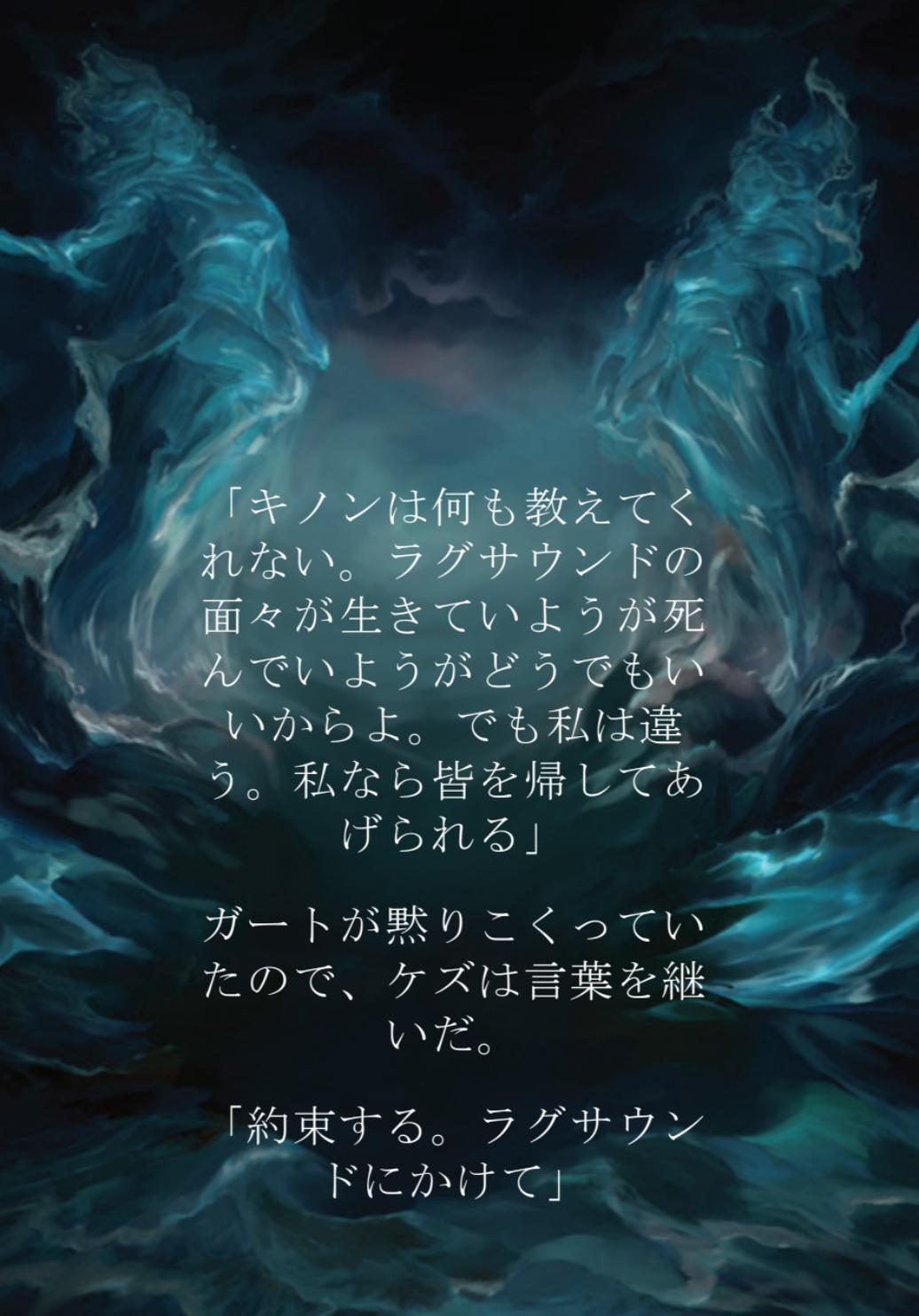


一行の船はマールウェンズ・ステイへと向かう。島との距離が縮まるにつれ、ガートの咳が軽くなっていく。はしけ船は賢者のお供全員が座れるほど広かった。そのぶん人手も必要で、キノンは船を漕がせるために囚人たちの手枷を外すよう命じた。賢者が見えないところに去った後、反乱を起こしたらどうなるだろうとケズは思った。そんな考えを抱いたのは初めてではない。船を乗っ取り、どこかの新天地を目指す… 何度か嵐に見舞われるだろう。それに、遠くまで行かなければならない。この場で一番旅慣れた者よりずっと遠くへ。

しかし、長い日々を耐えた彼女は償いの魅力がわかるようになっていた。ほんの2日我慢して、ほんの少し裏の仕事を片づける。それだけで皆家に帰れるのだ。それに、彼女はパルティクのような人々の性根を知っていた。あの素早い敬礼を見ればわかる。チャンスを断るすべを知らないのだ。彼らはラグサウンドの人間だ。ほとんどの者はいかなる種類の機会とも縁がない。

霧はしだいに濃くなっていく。はしけ船の網には、雪のように白い蜘蛛の糸を思わせる水滴がまとわりついていて、みぞれなどを防ぐために張ったものだが、湿気の前ではまるで無力だ。船首のほうで、誰かが一定の調子で角笛を吹いている。霧がたちこめている時は、こうして音を出さないとすぐぶつかってしまうのだ。

最初は一部のラグサウンド出身者が船を漕いだ。オールを取り合いまで起きたほどだ。やがて日が傾きだし、船を漕ぐペースが



「キノンは何も教えてくれない。ラグサウンドの面々が生きていようが死んでいようがどうでもいいからよ。でも私は違う。私なら皆を帰してあげられる」

ガートが黙りこくっていたので、ケズは言葉を継いだ。

「約束する。ラグサウンドにかけて」

落ちてくると、キノンの指示で衛兵たちが代わりに漕ぎ手となったラグサウンドの面々は特に腕が立ちそうでもなかったが、ガートは少なくとも戦いの経験がありそうだった。ケズはこの男がパルティクと話しているところに近づき、わかりやすく咳払いをした。

「賢者と衛兵は人数について言っていた？ 土地の様子はどうか？ どんな武器を持ってきたとか聞いた？」

ガートは大声で笑った。「今度は何だ？ 仕切る気か？」

ケズはこの手の人間を知っていた。この男の世界には権威が一つしかない。そこで彼女は訴えた。「いいえ。生きてここから出たいだけ」

足元のおぼつかない船の上だが、相手はすっと立ち上がった。ガートは長身だった。近くに立たれるだけで身がすくむような体躯だ。ぼきぼきと指を鳴らす仕草は堂に入っている。しゅちゅうやっているのだろう。

武器は持っていない。彼女から見える限りは。だがこの男にはリーチがあった。おまけに、ずっと縛られていた拳が自由になったばかりだ。ケズが平静を保とうとしていると、それをあざ笑うかのように相手は言い放った。「冗談でも俺に指図なんかするんじゃないぞ、嬢ちゃん」

静けさは役に立ちそうになかったが、ケズはただでさえ乏しいチャンスを損ないたくなかった。彼女は苦労してなんとか苛立ちを抑えこむ。「私はスパイラルに行って帰ってきた人間よ。指図してもらえて運がよかったと思うことね」

ガートは笑みを浮かべた。半開きの口に並ぶ歯はすきつ歯だ。豚のような顔を楽しげに上気させながら、彼女に近づいて大きく腕を広げる。言いたいことははっきりしていた。どうせ口だけだ。どうした。かかってこい。にらみ合う二人の姿が見えていたとしても、衛兵たちが気にしている様子はなかった。

ガートを船から放り出すことはできなかった。そんなことをしたら凍え死んでしまう。そこで彼女は立位を取り、片手の拳を突き出すと、反対の腕をぐっと後ろにそらしてボディブローの構えをとった。ガートは緊張し、両腕を上げて守りに入る。ケズは

すかさず股間に蹴りを入れた。

安っぽい手だった。ラグサウンドのとおき。危険だがありがちな出来事だ。それからちょっとした混乱が続いた。やせっぽちのパーティクがほかの囚人たちを必死に抑えたり、数人が示し合わせて彼女を船から放り出そうとしたり。それ以外の者はだいたいゲラゲラ笑っていた。気づけば皆、寒さを忘れていた。

ガートは首の静脈が浮き上がるほど怒り狂っていたが、やがて落ち着きを取り戻し、一緒になって笑い始めた。ケズは両手を上げ、もう敵意はないことを示す。そして、ラグサウンドの面々に行き渡る程度に大きく、賢者の一行には届かないくらいの声で言った。

「キノンは何も教えてくれない。ラグサウンドの面々が生きていようが死んでいようがどうでもいいからよ。でも私は違う。私なら皆を帰してあげられる」

ガートが黙りこくっていたので、ケズは言葉を継いだ。

「約束する。ラグサウンドにかけて」

ガートは立ち上がり、船べりから何かをペッと吐き出すと、両手を高く掲げた。今度の笑みは違っていた。ようやく話を聞いてくれたのだ。

ケズとガートとパーティク、3人はゆっくりと船首へと進んでいく。霧の塊が漂ってくるので慎重に足を運ぶ。キノンのそばには両脇に2人の護衛がいた。もう1人、大きなトランクに座った衛兵が時折角笛を吹いている。霧の中を船が進んでいるという合図だ。賢者は舳先の向こうを一心に見つめていたが、ケズが声をかけると素早く振り向いた。

「相手は何人？」

キノンは険しい顔をしていた。「ほぼ全員避難させて、残るは2家族です。島に残っているのはせいぜい8人でしょう」

ケズの計算だと、囚人は全部で6人。ポニード、セドローク、シラ、パーティク、ガート、そして自分だ。彼女はキノンに近づいた。衛兵に警戒される距離には入らないよう意識しながら。

「テンペストはいないの？」

キノンは片眉を持ち上げた。思いもよらない質問だ。まさか彼

女がそんなことを聞いてくるとは。

「ペルガインで別の任に当たっています。マールウェンズ・ステイの近くにいる中で、曲がりなりにもテンペストが一番近いのがあなたです」と、平板な声で彼は言った。

ガートがせせら笑う。賢者の言葉を疑っていることに気づいていないようだった。「こいつがテンペスト？ 本当かよ？」信じられないという面持ちで見つめてくるその目には、新たな何かが宿っていた。恐怖？ それとも賞賛？

本来なら今頃そうになっていたとケズは言おうとしたが、キノンはその抗議を一蹴した。「修行中の見習いでしたがね。今もマールウェンの責務を担えて、この方は幸せ者ですよ」

修行ならほとんど終えていた。凍った湖を一人で渡り、一度に数分霧を吸い込み、それを何年も繰り返した。剣の舞いを覚え、マールロジを退治し、風と波を操るために犠牲まで払った。それもこれも、ペルガインに伝わるいにしへの知恵の器となるためだ。彼女は心の中に、絶え間なく囁く一生分の言葉を受け継いでいた。千の声で語られる、何世紀にもわたる記憶を。

もともとケズは苛立ちを覚えやすいたちだった。だが霧が、その小さな声が織りなす柔らかなざわめきが、それを一段と悪化させた。彼女の国で静けさが尊ばれるのには、それだけの理由があったのだ。

身分のことで言い争っても埒が明かない。この男が相手では何を言っても無駄だ。「トランクの中身は？」

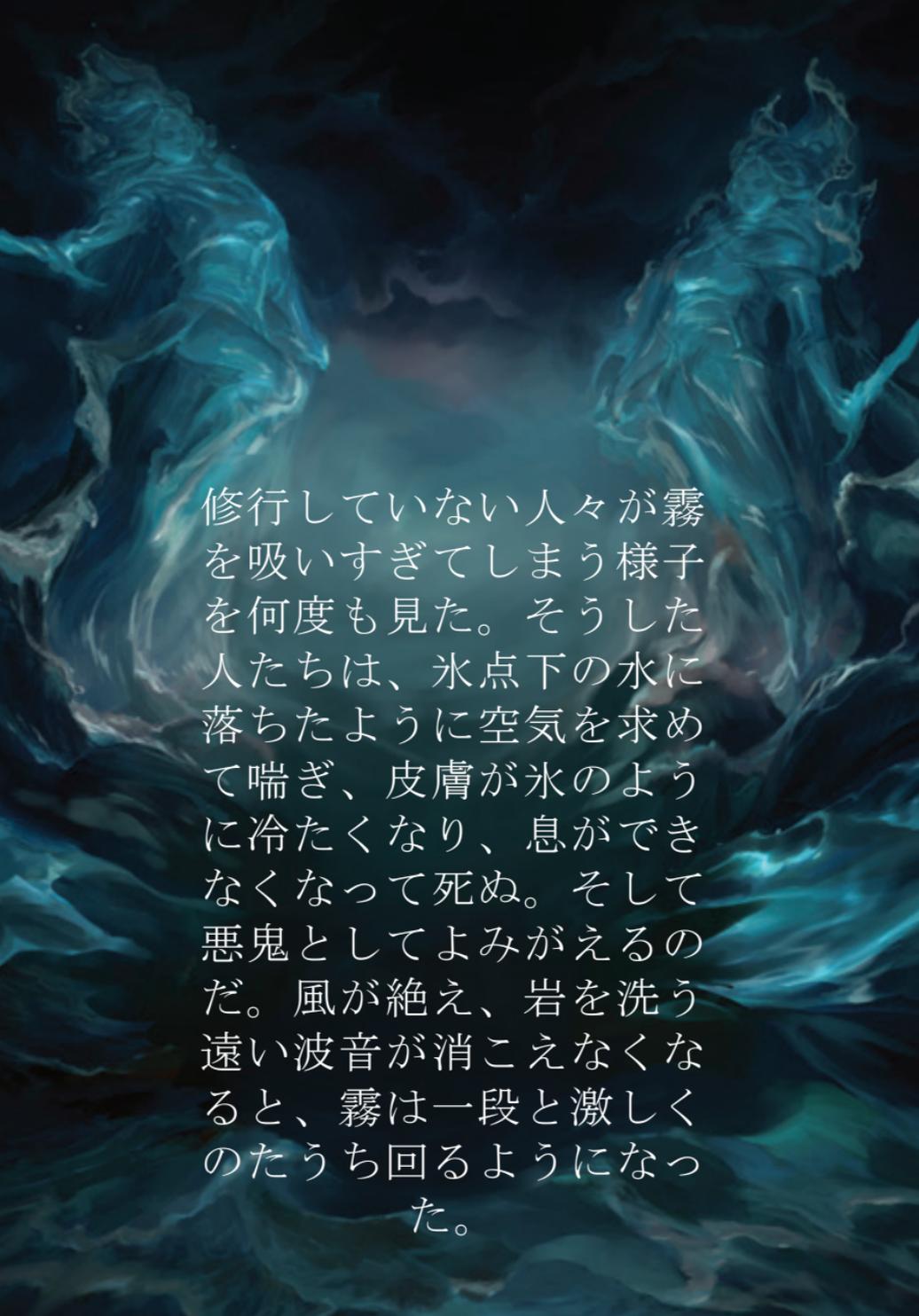
角笛を持った衛兵は従順にトランクから飛び降り、蓋を開けてみせた。「全員分の槍です。ほかには、丈夫な革の防具が少々」

「それだけ？」ケズはしばらく待ったが、期待した返事が返ってこないで自分から言葉を継いだ。「私の剣は？」

キノンはため息をついた。「あなたには無用の長物でしょう」

つまりあるということだ。失敗を思い出させるために持ってきたのだろうか？

賢者への怒りは罪だった。怒りに任せて罵れば、罰を受けても文句は言えない。ケズはふさわしい言葉を組み立てようとした。嘆願するのだ。しかし、出てきたのは痛みだけだった。



修行していない人々が霧を吸いすぎてしまう様子を何度も見た。そうした人たちは、氷点下の水に落ちたように空気を求めて喘ぎ、皮膚が氷のように冷たくなり、息ができなくなって死ぬ。そして悪鬼としてよみがえるのだ。風が絶え、岩を洗う遠い波音が消えなくなると、霧は一段と激しくのたうち回るようになった。

「私の数年分の人生よ、この口達者なクソ野郎」

キノンの魚のような頬が膨らんだ。彼が両腕を掲げると、従者たちが前に出る。角笛を持った衛兵がケズを捕まえにかかるそぶりを見せたが、ケズは手を握り締め、膝を曲げた。

バルティクが間に割って入り、ケズの腎臓あたりを小突いた。言いたいことはわかった。この中の誰かが問題を起こせば、全員沈められる。下々の者の発想だ。

「賢者キノン、どうか聞いてください。我を忘れたのはよくないけど… 贖罪を思っただけの言動なんです。俺たち一人一人の」バルティクは柔らかい手のひらで自分を指し、ケズを指し、衛兵たちを、囚人たちを、最後に賢者を指した。「お願いします。俺たちは皆、罪人です」

ケズの嫌いな言葉だ。コールドアイルのあらゆる場所で当たり前とされる考え方。ペルガインからどれだけ離れてもそれが変わることはなかった。表向きは「人は皆過ちを犯す」という意味だが、ここにはもう一つ「他人の過ちを自分の過ちとして受け入れる」という意味が込められている。卑怯にも程がある。自分がしたことの責任を大勢の人間になすりつけ、誰にも見えなくなるほど薄めてしまう詭弁。そのせいで軟弱者が指導者になり、許されざる者が許され… 縁故や鼻肩がまかり通る。キノンの罪-賢者たちの罪-はコールドアイルのすべての人間の罪ということになった。しかし、ケズの怒りは彼女の問題だ。その怒りがどんなに正しいものでも。

もっとも、バルティクの言葉は賢者キノンに響いたようだ。当然だろう。彼はかぶりを振った。「だったら、持っていきなさい」

衛兵たちがトランクを開け、中身をかき分ける。それを見ながらキノンは続けた。「明日の日没ごろ迎えにきます。悪鬼の数を減らした証拠が手に入るまで、話すことは何もありません。あなた方1人につき1体は倒さないと、恩赦はないと思うことです」

ほかの者たちが革の防具を身につけていると、衛兵がケズの剣を持ってきた。それを手渡された彼女は、溜息をこらえるのが精一杯だった。この鋸刃の剣が折れた時のことはよく覚えている。あの後誰も直そうとしなかったらしい。彼女の顔が映るほどに刃

身が磨かれていたのがせめてもの救いだった。

風の刃は貴重なものだったはずだ。この剣があればこそ、テンペストは北風の怒りをペルガインの敵にぶつけることができる。柄は取り付けられて何年も経っていた。古びて、いびつに歪み、本来の美しい姿は見ると影もない。

だが無駄ではない。彼女にとっては。



ごつごつとした茶色い地面が広がっていた。一行は平らなところを探してはしけ船から飛び降りる。岸には氷の塊が打ち上げられていた。いかだとして利用できそうなほど大きいものばかりだった。島の丘陵を二つに割るように小さな谷が走っていた。霧が一番深いのもそこらしい。6人の囚人たちは重たい足取りでそちらに向かう。先頭を歩くのはケズだった。

キノンはケズに直接言うのを嫌がって、ガートに彼らが仕事を片づけるのを霧のそばで待ちはしないといていた。ほかの場所に用事があるのだそうだ。嘘か誠かはともかく、それが本人の弁だ。任務に不適當な者は岸で迎えを待てともっていた。殺されて悪鬼としてよみがえり、事態を悪化させるよりマシということだろう。

少なくとも暖かくはなった。毛皮や、臭いはひどいがモコモコした羊毛で作ったマント、数袋ぶんの乾燥キノコをキノンが持たせてくれたからだ。賢者は彼らの成功に少しだけ期待する気になったらしい。しかし、それは全員無事で帰ってこいという意味ではなかった。

谷の端で足を止めて一息つく。一行のブーツが砂利を踏む音は、島にいない鳥や虫に代わって奇妙な音を響かせた。

谷の入口からのぞいてみると、地面から霧が吹き出しているのが見えた。冬の朝の息を思わせる白さだった。霧の塊が彼らのいるほうにも漂ってくる。ケズは触れないようによけ、ほかの者にも気をつけるよう促した。修行していない人々が霧を吸いすぎて

しまう様子を何度も見た。そうした人たちは、氷点下の水に落ちたように空気を求めて喘ぎ、皮膚が氷のように冷たくなり、息ができなくなって死ぬ。そして悪鬼としてよみがえるのだ。風が絶え、岩を洗う遠い波音が消えなくなると、霧は一段と激しくのたうち回るようになった。

討伐隊はさまざまな構えで槍を握っていた。肘がガチガチに固まった者もいれば、脇を締めすぎの者もいる。ケズは顔をしかめた。半分くらいは狩りで槍を使っていた者がいるかもしれない。よくてその程度だろう。

パルティクが短く槍を持っていたので、ケズは肩をぼんと叩いて持ち方を直してやった。「槍を持つときは、切先からある程度離れたところを握るといい。あまり近くを握ると、刺した時に指まで傷つけてしまうからね」

「お前が先頭を歩け、パルティク」わざとらしくかぶりを振りながらガートが割って入る。「帝国の男なら、自分が何に向いているかわかるよな」

ケズは嗤みついた。「この場にいるのは自分だけじゃない。この中の誰かが死ねば、そのぶん悪鬼が増える。あなたでもわかる簡単な計算だと思うけど？」

ガートはバカにするような笑みを浮かべただけだった。少なくともこれで黙るだろう。パルティクは赤面していたが、槍の握り方を変え、歩きながら宙を突いて練習していた。

大したことではない。だが何もしないよりましだ。それに、彼らを守るとラグサウンドに誓った。だからケズはゆっくりと歩を進め、先へと続いていく道と唯一の剣の刃を交互に見返した。こうして数分おきに自分の反射を確かめながら、一行が完全に霧に囲まれないよう細心の注意を払った。

マールウェンズ・ステイの人々が家を建てるなら、おそらく高所、谷よりも高いところだろう。そうすれば水害を避けられる。ケズは皆で谷の尾根を登り、村を探そうと考えた。お目当てはそこにいるはずだ。囚人たちを引き連れ、大きく弧を描くようにして斜面を登っていく。途中、濃い霧に出くわしたときはジグザグに動いて谷の壁面から離れた。細かい砂利が目立つところでは、

まずは自分で足元を確かめ、それから同行者たちに前進を促した。

上に行けば霧が薄くなるだろうと思っていたが、小一時間ほどして、セドロークとシラがぎょっとしたそぶりを見せた。ケズには聞こえなかった音が聞こえたらしい。二人とも首が痛くなりそれほどキョロキョロと辺りの様子をうかがい、何やらぶつぶつ言い始めた。確かな兆候だ。

ケズは口を開いた。正確に指示を伝え、結果に関しては黙っている。「今から話をするわ。視界が晴れるところに出るまでしゃべり続ける。私の声だけに耳を傾けて、それ以外の音は一切無視して」

誰からも異論は出ない。彼女は一行の尻を叩いて険しい坂道を上らせながら、ラグサウンドへの不満をぶちまけたり、海氷の上を歩いたことや、贖罪の前に最後に食べたサトルフィンとキノコの料理がおいしかったという話をしたりした。あまり人に言いたくないことも話した。故郷の友人が懐かしいとか、そういう類のことだ。

「シャーカンと二人で、夏はよく海氷の上を歩きに行った。あの子はテンペストになりたかったわけではないと思う。だけど、故郷の一部が砕けて、宙に浮いているのを目にしたら…

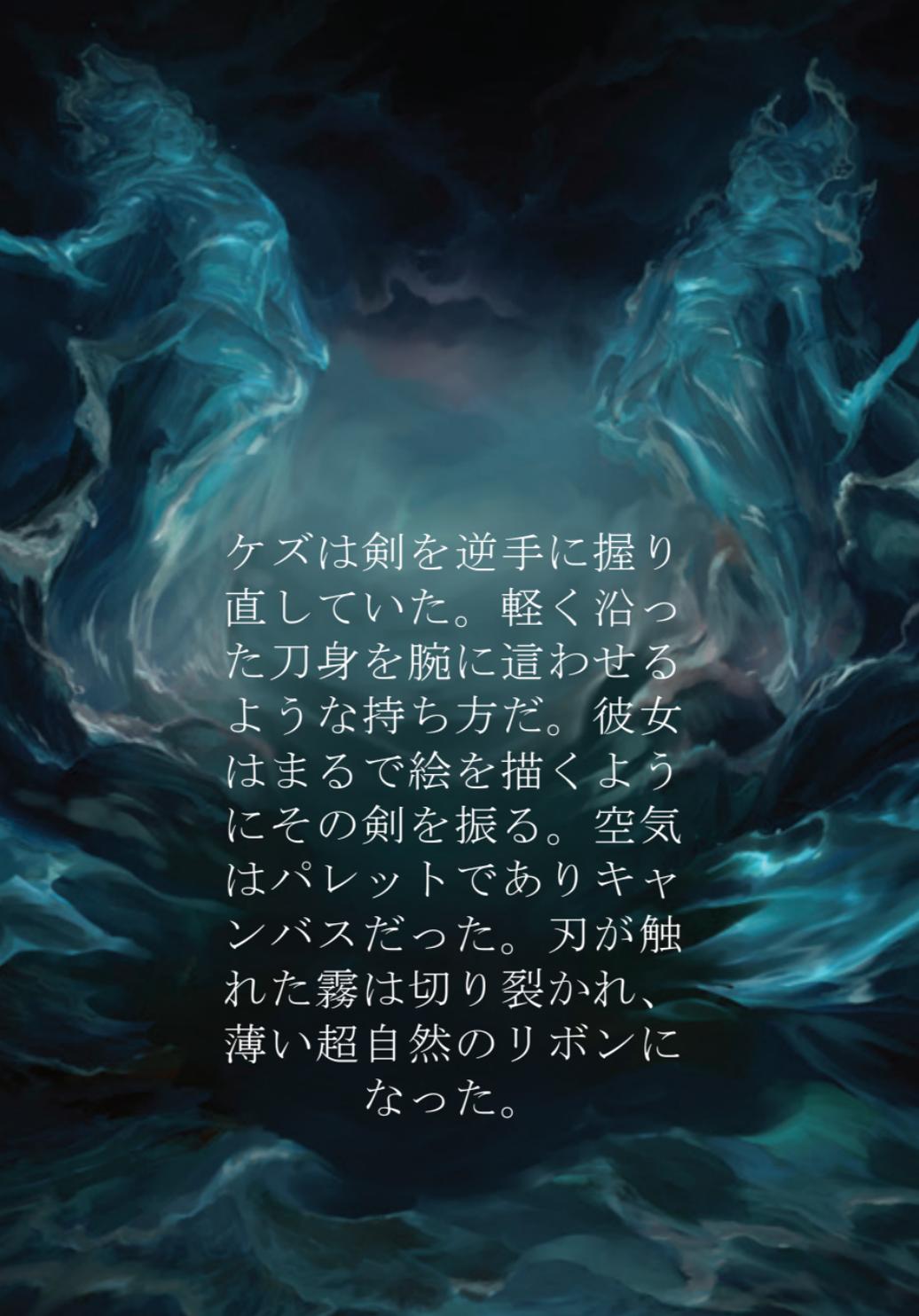
何もしないわけにはいかない。彼女は皆まで言わなかったが、パルティクはうんうんうなずいていた。

「剣の舞いを教えてもらいに、一緒に賢者たちのところに行った。氷の上に横になって、心に浮かんだことを片っ端から言葉にしたわ。純粋な気持ちも、暗い思いも。3日もすれば見込みがないと言われて、追い帰されると思っていた。でも、そんなことはなかった。あの時は公平に判断してもらえたのね。私は修行に励んだ。何ヶ月かして、スパイラルに船出する許しが出た。最初の霧を口に含むまで何年もかかった。私たちは…」

言葉が尻すぼみになる。平静を保たなければ。集中するのだ。

「その前は何してた？」と、ガートが息を切らしながら聞いてきた。

「ただのくず拾いよ。生きていくだけで精一杯だった」特別なことは何もない。



ケズは剣を逆手に握り直していた。軽く沿った刀身を腕に這わせるような持ち方だ。彼女はまるで絵を描くようにその剣を振る。空気はパレットでありキャンバスだった。刃が触れた霧は切り裂かれ、薄い超自然のリボンになった。

「そうなのか？ 俺もだ」とガートは言った。

「同じく」とパルティク。

話すことが尽きると、ケズは祈りを繰り返して唱えた。浄化、平穏、遺産、3つの祈りを続けて口にする。声に出すだけで、意味まで考えはしなかった。

歯止めなき力は魂の滅び。

人目を意識して生きるは変化。

勲（いさお）は小さな恨みを雪ぐ。

そのうちパルティクが一緒になって唱え始めた。ほかにも何人か続いたが、皆不安げにあちこち視線を走らせていた。谷の中腹あたりまで来ると、雪をかぶった岩に霧がまとわりついていて、上下左右にうごめいている。まるで何本もの指がもぞもぞ動いているようだった。

変化は突然訪れた。ケズはあらためて反射を確かめたが、霧のせいで自分の顔さえ見えなかった。片手を上げて止まれと合図する。

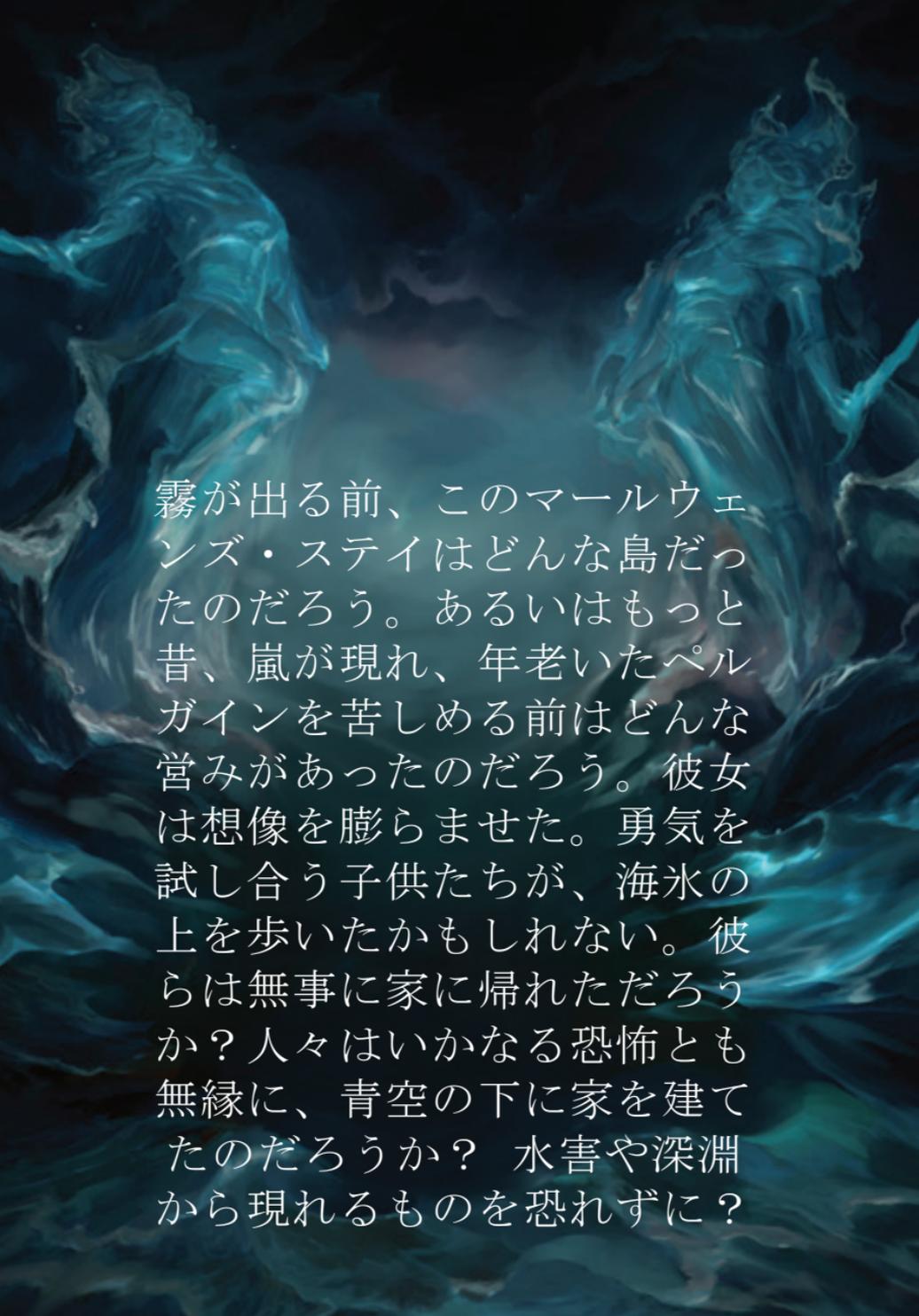
皆怯えた顔をしていた。ケズが修行したのはこれと似たような場所だったが、最初は一度に数分だ。一人前のテンペストでもこんな霧に出くわすことはあるまい。濃い霧の壁が上からのしかかろうとしていた。

尾根はダメだ。

溪谷の奥、一番深い谷底に隠れる場所があれば、まだ目標に声が届くかもしれない。結局、雨は降っていない。風は凪いでいる。そうやってじっとしていれば、霧は迫ってこないのではないか。

そうしよう。数分以内に小川が見つければ、避難場所と水、そして障害物が確保できる。見つからなかった場合は、来た道を引き返し、反対側からまた尾根に挑む。パルティクのおぼつかない足取りと、気が触れたように視線を走らせるガートの様子を見て、ケズは選択肢が狭まっていくのを感じた。彼女は大声でこう言った。

「おしゃべりはやめにする。先を急ぎましょう。ここから先は、川やせせらぎの音だけに耳を澄まして。水の流れを見つけて



霧が出る前、このマールウェンズ・ステイはどんな島だったのだろう。あるいはもっと昔、嵐が現れ、年老いたペルガインを苦しめる前はどんな営みがあったのだろう。彼女は想像を膨らませた。勇気を試し合う子供たちが、海氷の上を歩いたかもしれない。彼らは無事に家に帰れたのだろうか？ 人々はいかなる恐怖とも無縁に、青空の下に家を建てたのだろうか？ 水害や深淵から現れるものを恐れずに？

上流を目指しましょう」

口数の少なくなったガートが小走りで一行の先頭に立った。頭を突き出し、霧に向かって目を細める。「俺は耳がいい。先頭は任せろ」

狩人だろうとは思っていたが、ガートはやるべきことをわかっている人間だった。だから反対しなかった。ほかの者たちも彼について駆け出す。皆がキョロキョロと左右を見ている間、ケズは水音を探すことに精神を集中した。耳元に忍び寄る、半分形になった囁きは全力で無視した。

歯止めなき力は魂の滅び。

そして…。

強く握られた力は世界の滅び。

彼らは急いで丘を下った。呼吸が浅く、肺が苦しい。谷が平らになり、山道は曲がりくねってくる。一向はガートの後ろにぴたりとついて一列で走っていた。皆押し黙り、霧ではぐれる者が出ないよう神経をとがらせている。

ガートが立ち止まった。ケズは危うくぶつかりそうになる。彼は肩をすくめ、何かを見つめていた。彼女には見えない何かだ。緊張が走る。ケズは数歩ほど後ずさりして、体の正面で剣を構えた。ガートが振り返る…。

その顔はおかしそうに笑っていた。数十メートル先に小川があったのだ。半分凍った、青緑色のせせらぎだ。植物や魚は見当たらない。水は数メートルほど下がった角ばった岩の上を這うように流れていたが、下流に行くほど広がっているのがケズにも見えた。谷の壁面から走って1分ほどの距離だろうか。うまくいくかもしれない。

ケズは安堵のため息をついた。だがそれはすぐに凍りついた。周囲の人影から同じような突風が吹いてきたのだ。向こうの顔はよく見えない。扇状に広がって近づいてきてもそれは変わらなかった。数を数える。ほかに5人いる。囚人は全員そろっていた。

「ここにいることを知られたら、死者たちが寄ってくる」とケズは説明した。「この川を利用して呼びかけてみる。1人だけけど」

そして言葉を継ぐ。「中には生前と同じような姿の者もいる。でも、あれはもう人間じゃない。霧の魔物よ。気を許せば、呼吸も肌も奪われる」

パルティクの顔が恐怖にゆがむ。ケズは反射的にしゅんと唇に指を当てた。ガートが珍しく神妙な顔をして、仕留めたことはあるかと聞いてきた。

「まだない」と彼女はかぶりを振る。「でも、死ぬところは見た」

「だから1本しか剣がないのか？」ガートが自分の冗談を鼻で笑う。テンペストは2本の剣を持つ。1振りは誇りのため、1振りは実際に使うため。

ケズはこの男の皮肉を聞き流すことを覚えていた。

彼女はパルティクを見た。「聞いて。私たちは生きて帰れる。そうすれば、二度とあの賢者の顔色をうかがわなくていい」

「どうしてわかるんだ？」おずおずとした声だ。そろそろ限界なのだろう。

「約束したからね」と彼女は言った。思った以上に熱がこもってしまったが、息の無駄なので同じことを言い直しはしない。「ラグサウンドに誓うと言ったでしょう？」

パルティクは何も言わず、ただ見つめ返してくる。ケズは先を続けた。「待ち伏せが通じるし、殺すこともできる。一度に1体ずつ、慎重に。言うとおりにしてもらえれば大丈夫」

反対する者はいなかったので、これからどうなるか、ケズはわかることを全部話した。

「向こうに働きかけるには、水を流れさせる必要がある」ケズは氷で流れの滞った小川を指さした。「できるだけ速い流れ」

ラグサウンドには、オールドピナクルのような隆起した洞窟群も、ストームブレイスのような防波堤もなかった。しかし島民はたくましく、見えそうなものを探すのも、邪魔なものを壊すのもお手の物だった。そうした資質が帝政ペルガインの遺産の役に立たなかったのは事実だが。さておき、囚人たちは数分もしないうちにずっしりとした縦長の石を見つけ、一列になって急いでそれを運び、川に投げ込んで氷を割った。

ケズは剣を逆手に握り直していた。軽く沿った刀身を腕に這わせるような持ち方だ。彼女はまるで絵を描くようにその剣を振る。空気はパレットでありキャンパスだった。刃が触れた霧は切り裂かれ、薄い超自然のリボンになった。陣形を組んで見入っている囚人たちに、彼女は最高の知恵を語って聞かせた。

「あいつらは私たちの呼吸に寄ってくる。大きく息を吸って。霧は吸い込まないように。合図したら、ガートとパルティクは肺の中身を全部吐き出して。それ以外は息をこらえつつ、槍を手元で構えて待っていて。すぐだから」

一同が大きく息を吸うと、ケズは服の袖をたくし上げ、ぎざぎざになった剣の刃を脇の下あたりに走らせた。少し痛いのが、必要なもののためだ。数滴の血、かろうじて目に見えるほどの赤い滴が、氷の張った流れに落ちる。流れる水を目で追いながら、赤い染みのついた剣をそちらに向け、すぐに終わるよう亡きマールウェンに祈った。

祈りは現実になった。氷にヒビが走り、ケズが剣で狙った場所に風が吹きつける。川は大きくうねり、彼女の血を島の中心へと運んだ。

「今よ」

ガートとパルティクは宙に向かって冷たい息を吐き出した。数秒後、それに呼応するかのように嘆きの声が聞こえてきた。続いて人間の叫び声にも似た、犬の唸り声のような音が近づいてくる。近い。こんなに近いとは誰も思わなかった。ケズの呼びかけはうまくいきすぎたらしい。

槍を持ち上げる暇もないほどだ。霧が潮流のように押し寄せてくる。

ケズは身をよじり、現在から目を離すまいと必死にもがいた。しかし抵抗むなしく、過去の幻影が心に入り込んでくる。

兵士たちが家族を呼んでいた。死を悟った絶望の声だった。賢者キノンが声を張り上げ、戦え戦えと言っている。どういうわけか、どの声もはっきり耳に届いた。ありえないほど大きな音で激しい波が砕けていたのにだ。海は荒れに荒れていた。今日の穏やかな顔とはまるで違う顔。そこにいたのは彼女の仲間たちではな

かった。今の同行者たちではない。

霧の中ではすべての出来事が時のとも綱を解かれていた。霧はその内に記憶を留め、さらに多くを求めていた。ケズはそれを退ける修行をしていない。

だから頬の肉を血が出るほど噛み、しっかり剣を握って思いきり振った。気づくと現在に戻っていた。足元を駆けめぐる霧が大きく膨らんで、濡れた目隠しのように彼女の目を覆っている。

ケズはその場で一回転すると、霧を追い払えと風に命じた。風はそのとおりに霧を吹き飛ばすと、伸ばした剣からつむじを巻いて去っていく。すべての霧を晴らすとまではいかなかったが、少しは食い止められたのではないだろうか。

耳障りな音の鳴り響く雲の中で、彼女はほかの者たちを探した。だが、焦点を結んだのは2つの姿のみ。パルティクと、彼を飲み込もうとする影だ。

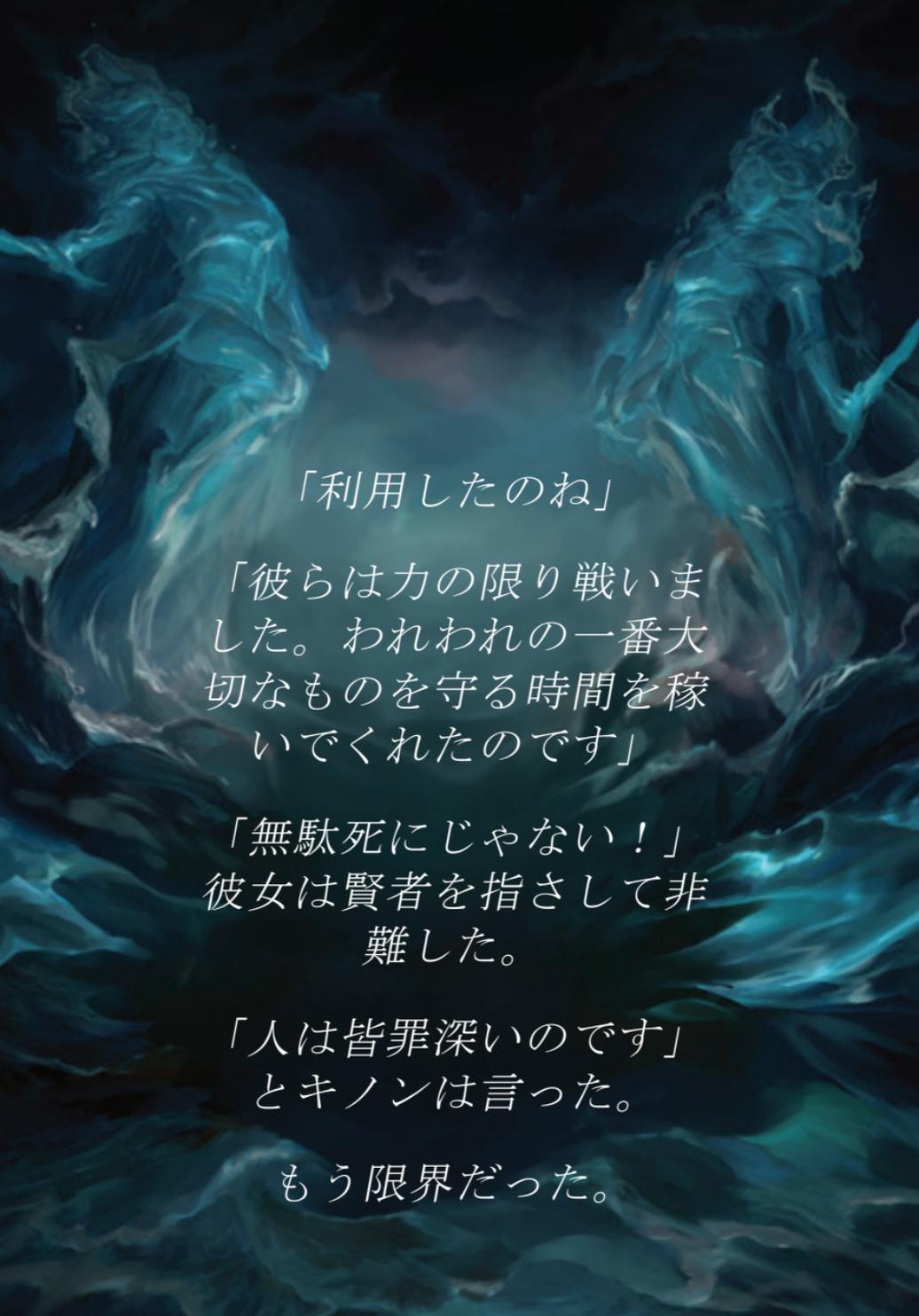
霧の魔物は少し前のケズよりずっと幼い少女だった。霧の中で命を落としたせいか、緩めの三つ編みは古びた苔色に染まっていた。皮膚は青白く、眼窩は落ちくぼみ、爪は伸びに伸びて指より長い。顎は苦悶に歪んだままこわばり、目は死体のようにうつろだった。霧に操られているのだ。

ケズはパルティクだけでなく全員に、悪魔が完全に実体化するまで攻撃を控えるよう言っていた。だが彼は槍を地面に落とし、霧の悪魔の冷たい指に手首と喉を締めつけられていた。

霧を追い払えなかったケズは、やむをえず切りかかった。しかし、生き物をつかまえている間、敵は一時的に実体化しているにすぎない。パルティクは皆に聞こえるほどの大声で悲鳴をあげていた。

ケズは大声でほかの者たちを呼んだ。

2本の槍が渦巻く霧の中から飛び出した。それからもう1本、またもう1本と続く。パルティクの手首をつかむ腕に、セドロークの槍が突き刺さる。さらにその下で、ガートが霧の悪魔の足を切り落とした。苦悶の表情のまま固まった死者の顔が振り向いたところで、さらに2本の槍が脇から突き出される。悪鬼は音もなく絶命し、虚ろな目から白い霧が漏れた。



「利用したのね」

「彼らは力の限り戦いました。われわれの一番大切なものを守る時間を稼いでくれたのです」

「無駄死にじゃない！」  
彼女は賢者を指さして非難した。

「人は皆罪深いのです」  
とキノンは言った。

もう限界だった。

ケズはぐるりと回ってほかの悪鬼を探した。もういないようだ。

強い風を起こして、パルティクの周りの霧を吹き飛ばす。彼の左手首と喉の周りは、乾いた目やにのような色に変色していた。悪魔につかまれたところがかさぶたのようにボロボロ剥がれ落ちる。彼はケズを見て、体を震わせながら湿った咳をする。全身が痙攣するほどの激しい咳だ。最後は地面に崩れ落ちた。

そこで呼吸している。息が止まる気配はない。助かったのだ。

霧はヒューヒュー音を立てながら、彼らの周りで完全な円を描いていた。ケズの力のおかげだ。風は彼女のもの、やむ気配はなかった。

「あと5体倒せて？」パルティクは苦しそうに喘ぐ。「岸に戻ったほうが無難だ」

「お前が死ねば4体だけでいい」とガート。

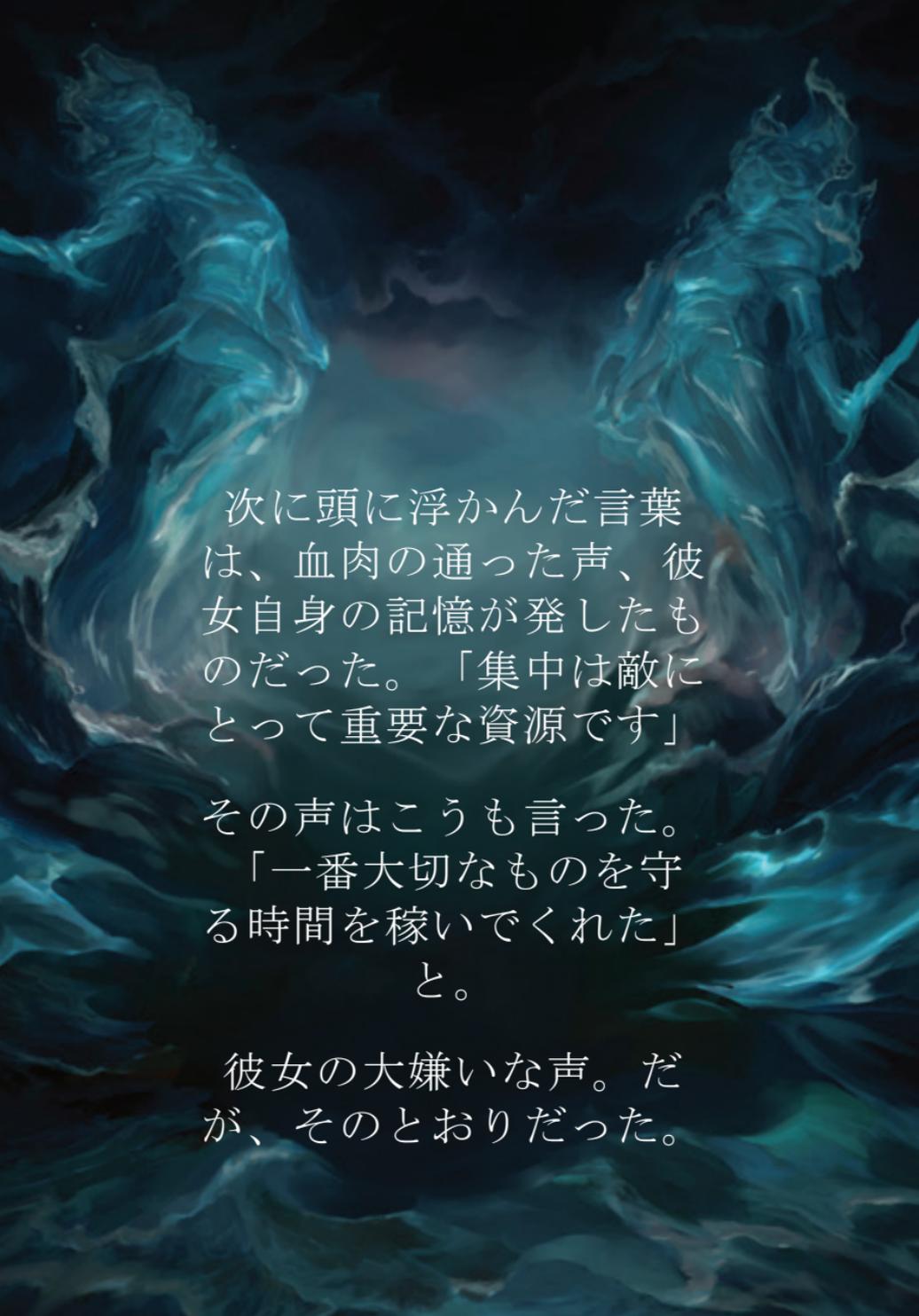
長く海岸にとどまっていれば、マーロジが現れる。いつもそうだ。死者と海獣の両方をいっぺんに相手にする気にはならなかった。ケズは首を振った。

それに、彼らはやっつてのけた。彼女はやっつてのけたのだ。パルティクは横たわったまま、霧の悪魔のところへと這っていった。皮膚が溶けてインクのように流れていた。彼は悪鬼の足首についていた青銅のアンクレットを外し、証拠としてポケットに入れた。

あの霧の魔物は誰だったのだろうか、とケズは思った。霧が出る前、このマールウェンズ・ステイはどんな島だったのだろうか。あるいはもっと昔、嵐が現れ、年老いたペルガインを苦しめる前はどんな営みがあったのだろうか。彼女は想像を膨らませた。勇気を試し合う子供たちが、海氷の上を歩いたかもしれない。彼らは無事に家に帰れただろうか？人々はいかなる恐怖とも無縁に、青空の下に家を建てたのだろうか？ 水害や深淵から現れるものを恐れずに？

彼女が修行を終え、約束に追いついたなら、その実現に協力できるかもしれない。

ケズは目を開け、空想を追い払った。ここではたやすく心に入り込んでくる。ケズが気を抜いている間に霧が下から忍び寄り、



次に頭に浮かんだ言葉は、血肉の通った声、彼女自身の記憶が発したものだ。「集中は敵にとって重要な資源です」

その声はこうも言った。「一番大切なものを守る時間を稼いでくれた」と。

彼女の大嫌いな声。だが、そのとおりだった。

囚人の足元をぐるぐる回っていた。谷は先ほどまで静かに見えたが、彼女が何度も風を呼んだことで…。

「高いところに行きましょう」口に出したその声は思うより切羽詰まっていた。彼女は大声でガートに言った。「手を貸してあげて。私はしんがりを務める。霧を押し戻すわ」

「また尾根を目指すのか？」とパルティク。足元がふらついていた。

霧がしたり落ちる。ぼつぼつと音もなく降ってくる。今はまだ小さく薄いかけらだが、すぐに…。

「俺は運ばんぞ」ガートはケズに直接怒鳴り返し、それからぐると一同の顔を見渡した。「やりたきゃ勝手にやれ！」

ケズは譲らなかった。「置き去りにはしない。それに、彼はまだ槍を持てる。どう、パルティク？」

パルティクはふらつきながらうなずいた。十分だ。

ガートは腕を組み、足を踏ん張り、時間の無駄をも省みず徹底抗戦の構えをとった。ところが、そこに霧が割って入った。まるで谷底に毛布をかけるかのように霧は上から二人を包み込み、気づくとガートはケズの前から消えていた。

ケズは皆を助けようと剣をひるがえし、谷の岸壁に向かっての空気のトンネルを掘った。だがそれは自分で思っていた幅の半分もなかった。霧が彼女を包み、四方からのしかかってくる。動き方からは想像できないほどの重みだ。

「走れ！ 尾根へ！」と声を張りあげる。

彼らの無事を確かめる隙はなかった。

ケズは霧に呑み込まれ、記憶の中に沈んだ。



ケズはまだ大声で呼んでいた。失ってしまった人たちを。その声が騒音にかき消されても。

とどろく波。吹きすさぶ風。それを切り裂くマーロジたちの唸り声。2年前、とてつもない大嵐がラグサウンドに荒波を叩きつ

け、島を洗い流すほどの大水に乗って海獣たちが現れた。

ラグサウンドの防波堤は、ペルガインを守る壮麗な壁とは似ても似つかぬ代物だった。あちらは白と鴨羽色で彩られ、首都のあちこちから集まった本職や素人の芸術家によるさまざまな装飾がほどこされていた。一方、ラグサウンドの防波堤は島民と同じものでできていた。つまり余り物だ。

しかし、ケズは命令を授かった。嵐が激しくなるそぶりを見せると、賢者キノンが洞窟の頂から降りてきた。高所に構えられたその住まいは、水害の最悪の被害を免れたという話だった。賢者はラグサウンドに少しだけいたブレードダンサー、すなわち修行中のテンペストを集めて、ペルガインから応援は来ない、彼らが… ケズたちこそが故郷の最後の砦だと告げた。

賢者は一同を2つのグループに分けた。まず、ブレードダンサー2人と民兵の志願者6人を自分たちの高床式の住まいとその付近の守りに当たらせた。不運もしくは間違った選択によって、安全な洞窟の頂ではなく、海岸付近に腰を据えた新たな島民を守るためという説明だった。

残りの民兵とケズたち8人のブレードダンサーは防波堤の守りを命じられた。

ケズは、防波堤なら十分に持ちこたえる、戦力を分けるのは命取りだと直訴したが、賢者は反論を許さなかった。防波堤はラグサウンドの生き残りの要であり、コールドアイルのあらゆる水際にとっても生き残りの要だった。そして、ラグサウンドは曲がりなりにもペルガイン帝国の遺産の一部だ。ペルガインとは過去から未来へと連綿とつながる幾世代もの人々のことであり、今日生きている人々だけのことではなかった。

こうしてケズは戦いに出た。衝撃に揺れる寄せ集めのような防波堤を這い降り、荒波が砕けるすぐ横でマージンに切りかかる。最後のほうは返り血で服がどす黒く染まり、硬い鱗を何度も何度も叩いたせいで指の爪も剣の刃もボロボロになっていた。

彼女は一人で戦ったのではない。命が助かったのはたぶんそのおかげだ。ケズは何度か倒れ、壁の残骸にぶつかって頭から

つま先まで全身ボロボロだったが、呼び出された風がそのたびに優しく立ち上がらせてくれた。子供の頃からの知り合いのシャーカンは、爪先だけでがれきの上をすいすいと歩いた。右手に風の刃を、左手に修行用の剣を握ったまま。彼女は本物のテンペストのように2本の剣を持っていた。じゃないとバランスが取れないから、と彼女は言っていた。

そのシャーカンは壁にもたれかかって死んでいた。マーロジの尾のトゲが喉に刺さり、茶色い体液の筋が顎にへばりついてた。

ぱっちり目のイザベルは電光のようにマーロジの群れに飛び込み、優雅な水のムチで海獣の手足を切り落とす。だが最後には、凶暴なサメの胴体と鋭利なヤツメウナギの口を持つ巨獣に捕まり、防波堤の足元にあった岩に叩きつけられ、一瞬でバラバラになった。

ケズは泣きながら、目をつぶって戦った。数分が1時間にも感じられた。思い出せないほど何度も転んでは起き上がり、危険な距離まで敵を近づけて懐に潜り込み、そこから刃物のように研ぎ澄ました風で相手の腹を切り割いた。防波堤は壊れなかったが、怪物たちは構わず攻撃を加えた。ケズは激しい熱に震え、全身に火傷を負いながら、最後には戦いを制して壁をよじ登った。

ギザギザの防波堤に沿って、おびたしい数のマーロジがネバネバした体液を垂れ流して死んでいた。早くもカモメにつばまれている死骸もあった。こうして、ラグサウンドはしばらくの間持ちこたえた。

防波堤の上で、キノンと付き人たちが彼女が登るのを見ていた。賢者は手を差し伸べ、彼女を引き上げる。血に怯む様子はなかった。浮かない顔だが、驚いてはいない。これ以外の結果を予期していなかったようにも見える。市場で活きのいいサトルフィンを買うのに、ちょっと余計に払いすぎた、ぐらいの顔だ。

ケズは1秒も無駄にしなかった。まだ時間はある、と吹き荒れる嵐に負けじと叫んだ。防波堤は守った。動かせるだけの戦

力を海岸に向かわせるべきだ。

「海岸は失われました」とキノンは怒鳴り返した。「あなた  
はここにいてください。嵐の動き次第では、マーロジが再び上  
陸し、蹂躪されてしまう可能性があります」

キノンは自ら要所を選び、手駒の戦力を集めた。そしてそこ  
を守るために、ここまでは失っていいと思ったものを切り捨て  
たのだ。ケズの友人や隣人が何人も死んでしまった。しかし、  
死にかけの帝国の土地は守られた。

彼らの足元では、ラグサウンドを守り抜いた者たちの髪やマ  
ントが海に浸かって生氣なく揺れていた。

どうして？ こんなのあんまりだ。

「どうして海辺に人を送ったの？ 住民は高いところに避難さ  
せて、ここに守備隊を集結させればよかったんじゃないの？」

「集中は敵にとって重要な資源です。そして、ブレードダン  
サーは一人でもマーロジの集中を分断できます。

やっぱりだ。こんなにはっきり言うとは。人を子供扱いして  
いる。

「利用したのね」

「彼らは力の限り戦いました。われわれの一番大切なものを  
守る時間を稼いでくれたのです」

「無駄死にじゃない！」彼女は賢者を指さして非難した。

「人は皆罪深いのです」とキノンは言った。

もう限界だった。

彼女はキノンに飛びかかり、顎を思い切り殴って転ばせ  
ると、獣のように吠えた。従者たちがそれを取り押さえ、ケズに  
手枷をはめた。こうして彼女の贖罪が始まった。

賢者への暴行は、本来は追放を意味した。もしくは死。ペル  
ガインには、その2つを組み合わせた独創的な刑があった。キノ  
ンが本気で怒っていたら、彼女は同じ日にいかにつながら、  
シヴァーケイ付近の海氷を漂流していただろう。動物の臓物を  
巻きつけられ、腹に長い切り傷を入れられて。そうすれば、彼  
女は海鳥たちと一晩過ごしたのち、日の出までにマーロジの胃  
の中にいたはずだ。

だが、そうではなく彼女を檻に入れた。そして外に出した。冷酷なキノンは彼女の命に価値があると考えていたのだ。あくまでも、自分にとっての利用価値があるということだが。

ラグサウンドは残骸の島だった。天候に見放され、防衛には向かない。横糸の朽ちた布とでも言うべきか。しかし、ケズはそのため血を流したのだ。

故郷に帰れなければ、何のためにあんな目にあったというのだ？



まるで、自分で顎を殴ったような気分だった。

霧の中で、過去が現在に入り込んでいた。気づけばそこはマールウェンズ・ステイ。彼女は尾根までの道の半分をよじ登っていた。記憶の中で防波堤を登ったのがそうだったようだ。あの時追いかけた悲鳴が今も聞こえる。聞き覚えのある悲鳴。ラグサウンドの面々から遅れ、夢にふけてしまった。そして、そのせいで…。

ここまで上っても霧は消えていなかったが、薄くはなっていた。霧の渦から解放されたおかげで我に戻ったらしい。岩をつかんだりしたせいで打ち身やら切り傷やらが手にいっぱいできていたが、剣はまだケズの側にあった。

ケズは残りの道を急いだ。一步踏み出すたびに風が支えとなり、足を前に運んでくれる。岩から岩へとよじ登り、数分で丘の頂に近づいた。その頃には囚人たちの悲鳴はほとんど聞こえなくなっていて、肺いっぱい霧を吸った彼らが見つかるのではないかと内心怖かった。どうしたことか、またしも不運な戦いを生き延びてしまった。

彼女は尾根に登りきり、露出した岩が平らになっているところに立った。こういう地形はありがたい。霧が足元で渦を巻いている。様子をうかがっているのだろうか。牙を向いてくる感じはしない。谷間にいたときほど警戒する必要はないだろう。

ぼやけた人影が丘の頂を漂っていた。体から煙が出ているものばかりだ。4体の霧の悪魔が群がっているところにガートがいた。腕をぐったりさせて地面に倒れている。動かぬ骸が1体下敷きになっていたが、それ以外は覆いかぶさるようにかがみ込み、まだ温もりのある息を彼の肺から吸い出そうとしていた。

ほかにも2体の悪鬼が、こちらはパルティクを囲んでいた。先ほど受けた傷のところに、霧の吹き出す指先をぎゅっと押しつけている。彼は逃げようともがいていたが、槍はどこにも見当たらなかった。

ケズは素早く風を放った。一陣のつむじ風がらせんを描き、残った霧を追い払う。悪鬼もそれに続くかと思っただけ、獲物に夢中で気づきもしない。

さっきは全員そろった状態で1体倒すのがやっとだった。今、武器を持たないパルティクは2体相手にしなければならない。

それでも、ケズは持てるすべてを使って戦おうと決めた。

ケズは大きく息を吐いた。すると、一番近くにいた悪鬼、元は長いチュニックだったらしいボロを着た長身の農夫がガートから離れ、こちらに向かってくる。ケズが円を描くように剣を振ると、空気の流れががしりと悪鬼を捕らえる。顔から数センチの距離だった。一閃、二閃、三閃。目にも留まらぬ速さで剣をひるがえすと、彼女が切った傷から白い雲が噴き出す。そうして悪鬼がよろめいた隙に、相手が首に下げていた装飾品の紐を切り、手元に引き寄せる。シンプルなペンダントだった。2つ目の討伐の証拠だ。

今度は剣から風を吹かせ、ガートの息を吸おうとしていた悪鬼に向けて、流れる空気を直接送り込む。そしてハリケーンのような勢いで前方に身を投げ出した。ぶつかった相手は体がしゅんとしぼんで、渦巻く霧にさらわれていった-だがケズが立ちあがったところにほかの悪鬼どもが襲いかかる。鉤爪のような指が振り下ろされ、彼女の体から肉の塊をこそぎ落とした。

ケズは引きずり倒される前に身をひるがえして距離をとった。肌につけられた傷は、冷たく焼ける凍傷のようだった。

ガートはもう目を開けていたが、喘ぐような声を出す霧の悪

魔がまだ彼を狙っていた。また、パルティクのところにいた2体のうち片方が、矛先を変えて向かってきていた。相手は両手を握り締めた姿勢でよろめいてくる。彼女は必死の思いでそれを切り伏せたが、視界が針の穴のように狭まってしまい、後ろからもう1体忍び寄っているのを見落としてしまった。伏兵は高く飛びかかり、彼女の頭皮と首を裂いた。

息を切らして喘ぐ。最初は痛みで、次はその悪鬼に息を吸われて。ケズはぱっと離れたが、肉離れで体が思うように動かず、風の力を借りた。その風もあまり遠くへは運んでくれない。操る力が落ちているのだ。

恥辱と怒りにうち震えながら、ケズは仲間たちのほうに目をやった。自分のせいでこんなことになってしまった。約束したのに。自分のせいで皆死んでしまう。

ケズは右手で弧を描くように剣を振り、広場を探る悪鬼を引き留めた。すかさず左手で空気の矢を投げ、パルティクに群がろうとする敵を狙う。この程度の攻撃では深手にならないが、気をそらすことはできるかもしれない。思ったとおり悪鬼が獲物から目をそらすと、ケズはパルティクに強い風をぶつけ、彼に触れていた手を振りほどくとともに、その体を数メートル離れたところに、背中が下になるようにして落とした。彼がよろよろと立ち上がったのを確かめると、自分は稜線のほうまで下がり、ガートの姿を探した。もうくたくだった。

彼は木立の境のところにいた。顔は青白く、生気がない。あの笑みはもう浮かんでいなかった。だが、彼は1体仕留めていた。この男は戦士だ。もしかすると...

目の前でいきなり何かが立ち上がった。眠たげな顔をしたセドロークだ。膨張した顎から霧が滴り落ちている。彼女は素早く剣を振ったが、空っぽの頭蓋骨をすり抜けてしまった。そこで、剣を握っていた手を離し、風の力で手元に呼び戻す。セドロークがつかみかかってくるその刹那、彼の頭部は首から滑り落ち、体はどさりと音を立てて倒れた。

だがその背後には、死んだ目をしたポニードとシラが四つん這いで忍び寄っていた。マーロジは厄介だったが、数に限りは

あった。ところが霧の悪魔はどうだ。犠牲者の数だけ数が増える。

ケズは後ずさりした。ブーツに当たった砂利が尾根を転がっていく。

誰を守ればいい？ 可能性があるとしたら誰？

ガートは戦力だったが、致命傷を負っていた。悪鬼はパルティクに群がっている。ということは息があるということだが、さっきの様子ではもう1体も倒せまい。残りの囚人たちは、物言わぬ骸か動く屍だった。ケズは立ってこそいるが、もうボロボロだ。命の火の衰えとともに、風を操る力も弱まっていた。丘の頂には5体の霧の悪魔の死体が転がっているが、残りはまだたくさんいる。ケズは勝ち目がないことを悟った。

このままでは勝てない。

次に頭に浮かんだ言葉は、血肉の通った声、彼女自身の記憶が発したものだ。 「集中は敵にとって重要な資源です」

その声はこうも言った。「一番大切なものを守る時間を稼いでくれた」と。

彼女の嫌いな声。だが、そのとおりだった。

ケズは残された心と体の力をふり絞った。両手で剣を握りしめ、無数の風のツルを呼び出し、生き残った仲間たちに向けて放つ。

風は胸に毒々しい赤い穴を空け、2体の悪鬼を退けようとしているガートを包み込む。持ち上げるほどの力はない。

しかし、肺の空気を絞り出させるには十分な強さだ。

彼が大きく息を吸うと、死んだポニードとシラはケズに背を向けた。骸骨となった鼻を宙に向け、格好の獲物を見つける。立ったまま震えるケズを尻目に、ラグサウンドの面々は宴を始めようとしていた。

ガートの首にいくつもの手が絡みつく。悪鬼どものむさぼり食う息が彼の命を吸い出した。悪鬼たちはますます飢えを募らせ、ガートを引きずり下ろした。霧でいっぱいになった口があんぐりとだらしく開く。

パルティクは狂ったように喘いだ。パニック気味に息を吸う

が、うまく入ってこない。必死の両目がケズを探す。その姿を見つけた時、丘の稜線で二人の視線が出会った。

力なく倒れていたのに、悪鬼たちがシューシュー音を立てていたのに、彼の声ははっきりと耳に届いた。

「やめろ… 助けてくれ。頼む」

ケズは目をそらさずにはいられなかった。

「約束…」とパルティクが言葉を振り絞る。「したのに…」

目を拭う。戦場に集中しなければ。

ガートにはほとんど空気が残っていなかった。窒息し、肌が青く変色した彼は、発作のように不規則に腕を振り、悪魔に向かって、死そのものに向かってわめいていた。何を言っているのかもわからなかったが、ただ一つ、彼女に向けたものらしき言葉だけは聞き取れた。心の中で囁かれたかのようにはっきりと。

「賢者と同じだな」

パルティクとガートが死ぬには何分かかかる。それまでの間、マールウェンズ・ステイの悪鬼たちは二人のほうに群がり、漂う霧の輪を作る。ブレードダンサーにとっては格好の餌食だ。たとえその剣が折れていようと。悪鬼どもは満足してかがみ込む。もう目の前のごちそうにしか頭がない。

ケズは体の傷よりもひどい、身を焼くような苦しみに耐えながら、息を殺して戦いの焦点が移る瞬間をうかがっていた。ひたすらにチャンスを待っていた。

剣は手の中で氷のように冷たく、霧は彼女を抱き寄せようとしていた。



キノンは風に吹かれていた。着込んだ毛布は暖かかったが、羊毛がチクチクするのは辟易した。ほとんどの部下ははしけ船に残っていた。島の谷から、囁きにも似たくぐもった音が聞こえてくるので気味悪がっているのだ… 本人たちは決して認めないだろう。あと1時間もすれば帰ろうと騒ぎ出すだろう。彼の身が危険だ

からとか、漠然とした心配を言い訳に。

賢者とは、いわば不確かなものにとっての死だ。彼がラグサウンド出身の罪人を送ったのは悪鬼を退治するためだ。彼らが成功したのか失敗したのか、それを見届けずに出発する気はなかった。2人の護衛を左右に従え、谷の端まで足を伸ばしてみる。その時、ブーツが土砂を踏みしだく音が聞こえた。

谷から降りてきたケズだった。足を引きずりながら、彼から数フィート離れたところでびたりと立ち止まる。護衛たちは万が一に備え、投げ槍を構えて後ずさりした。ケズは顔を上げて彼らを見る。ボサボサの髪は血と雨を浴びて艶を失い、顔はこの世のものとは思えないほど穏やかだった。まるで凍りついていたかのよう。革の防具は派手に裂けていたが、震えてはおらず、唇も動かなかった。黙りこくっていた。

両手で荷物を抱えている。キノンは護衛たちに向かって、武器を下ろせと身振りで合図した。

前に出て、ためつすがめつ品定めする。彼女のブーツには、歩いてきた道の砂利がついていた。白目の部分に霧の兆候は見られない。

賢者キノンが異常なしの合図を送ると、護衛たちは武器を下ろして岸へと踵を返す。ケズは無言で彼らの先を歩く。船に近づくにつれ、しっかりとした足取りで。

確かに彼女は血の気が多く、鼻っ柱の強い娘だった。贖罪を経た後にしてもだ。だが、そんな気質は和らいでいた。飼い慣らされたと言ってもいい。能力があって狡知にも長けている。何より、試練を生き抜いた。

長年にわたって、ペルガインの番人たる偉大な解放者たちは、島々に暗闇が襲いかかると賢者たちに警告を発していた。それは大水や霧よりも大きな危険であり、彼らの故郷を完全に消し去ってしまう恐れがある、と。解放者は予言者ではない。一つのところに留まらぬ彼らの目は、むしろその逆、歴史を遡って見ているだけだ。その闇がどのような形をとるか言えなかったし、知りもしなかった。わかるのは、それが彼らの国に課された最大の試練ということだけだ。

ケズが卓越したテンペストになったら、その闇を見つけ出し、耐えることもできるかもしれない。ひょっとすると、いつか暗闇が消え去り、嵐がやみ、帝国がよみがえるのを見守ることになるかもしれない。その時こう言われるだろう。彼女を首都に連れてきたキノンには先見の明があった、と。

「贖罪は？」彼女がはしけ船から数フィートのところに来たとき、彼は尋ねた。「ほかの者たちはどうしました？」

ケズは持っていた荷物を放り投げるように広げた。中身が船の甲板に散らばる。アンクレット、鎖、ペンダント、首当て。6人どころの数ではない。

「私たちは皆罪深い」と彼女は言った。

船に乗り込むケズを止める者はいなかった。

